

「飲まずに嚙んだ?」「嚙まずに飲んだ!」

—グループホームにおける相互行為—

Interactive Behavior Between a Particular Resident and
Nursing Care Providers at a Group Home — Its Beneficial
Influence on Her Who Swallows Food Without Chewing

上田宜子¹⁾・藤澤枝美子¹⁾・青木信雄²⁾
細馬宏通³⁾・吉村夕里⁴⁾・吉村雅樹⁵⁾

Ueda N, Hujisawa E, Aoki N, Hosoma H, Yoshimura Y, Yoshimura M

要 約

グループホームの入居者の抱えている問題は、単に入所者個人のモノではなく、入所者と介護職員との相互作用によって構成される。本研究では認知症対応型Sグループホームの介護職員と入所者との間に起こる双方の働きかけについて、とくに食事場面の咀嚼行為に焦点を当て、じっさいの会話データに基づき相互行為分析により明らかにする。

Key Words : 相互行為, 会話分析, 食事場面, 咀嚼, グラウンデッド・セオリー

はじめに

グループホームケアは、食事、排泄、入浴といった日常生活の援助から自立支援まで中長期的なさまざまな課題の連続である。入所者と介護職員はそれらの課題達成に向けて人と人との直接的なやりとりの中で、協働作業を行いながら課題を相互的に達成させている。しかし入所者は自らの欲求を言語で伝えることが出来ない場合や、介護職員がその欲求を十分理解できない場合が多く発生し、支援すべき内容や方法、効果を検証することは容易ではない。

中でも摂食障害者に対する介護者の働きかけの困難さは注目すべき具体的な課題のひとつとされている。そこで本研究では食事での咀嚼指導場面を取

1) 聖泉大学短期大学部介護福祉学科 2) 龍谷大学社会学部臨床福祉学科 3) 滋賀県立大学人間文化学部
4) 京都文教大学人間学部臨床心理学科 5) 京都工芸繊維大学工芸科学研究科 博士後期課程

り上げ、介護スタッフによる利用者への行為と、それに対する利用者による介護スタッフへの行為とを観察し、介護現場における課題解決がどのように相互行為的に達成されていくのかを解明することを試みた。

1. 研究の目的

日常の行為は、まったくの気まぐれで行われているわけではない。「相互行為の過程の端点には、必ずなんらかの期待が付着している¹⁾」と西阪は述べている。各参与者によって行われる一つ一つの行為は、未来に向けて行為の可能性を投射する。これらの投射は、続く行為のあり方に影響を与える一方で、行為を理解する重要な手がかりとなる。

では、グループホームにおける介護場面では、介護職員と入所者とはどのような相互行為によってお互いの抱えている問題を投射し、理解しようとしているだろうか。本研究では、特に食事場面における、ある入所者の咀嚼行動を事例として取り上げ、介護場面における相互行為を分析する。

本事例は認知症高齢者 GH が抱える課題の中でも、被介護者と介護者の間で指導すべきテーマが比較的はっきりしており、さらに被介護者 K と介護者が合意の上で、咀嚼の改善に取り組む準備段階にあったおかげで、初期から中後期にかけての指導の変遷を追うことができた。本研究では、こうした相互行為の変遷にも留意し、分析を進めた。

認知症高齢者の食事摂取困難者に対してどのような働きかけが有効かという問題は、グループホームケアの重要課題である。相互行為分析を通して、グループホームケアのレベルアップに資する何らかの方法を見つけることも、本研究の目的である。

2. 事例の背景— K の咀嚼行動に対する指導に至る経緯—

対象施設は S グループホーム（以下 GH という）の入所者 K と複数の介護職員達である。

入所当初、K は入れ歯を持っていなかった。入れ歯を装着する習慣がない

人であっても歯茎で咀嚼し「食べる事」に問題のない事例は多々ある。当時、介護職員（以下ケアワーカー『CW』という）はKに対して飲食も含めて何も問題がないと認識し、他の利用者と変わることなく普通の暮らしをしてもらっていた。

入所後しばらくして、K本人の希望で入れ歯を造った。ところが、入れ歯装着後、Kは、入れ歯の間から舌をだし舌の上に食べ物をのせ、舌をくりりと巻き込むかのように素早く一気にゴクンと飲み込む行為が目立つようになった。入れ歯という「噛む」道具を装着したことで、かえって「噛む」プロセスの不在が際だつようになったのである。

噛まずに飲むことは誤嚥を引き起こしやすく、喉つめやむせにつながる危険な動作である。利用者の安全な生活を支援することはCWの仕事の一環として課されている。「噛まずに飲む」というKの飲食スタイルは、CW間で当然、問題視された。

CWたちは、食事時、介護職員による咀嚼行為の指導を繰り返し、その矯正を試み始めた。

具体的には、1日3回、食事の度にKの隣にCWの一人が座り、一口ごとに「噛む」ための指導を繰り返した。当GHの施設方針の一つに「ゆったりと、その人らしさをうけとめる」とあることから、心理的なバインドを用いるような手段や、脅迫的な手段は用いられなかった。また、利用者全員で食事をするのが施設方針であったので、一人だけを隔離する集中指導は行わなかった。

医師や専門家による助言は得なかった。ただし、入所者K自身の入れ歯や咀嚼運動という部分的な運動系に問題が局在していないことは、予め歯科医師の確認を得た。



写真1 Sグループホーム（GH）全景

3. 被介護者Kの属性と状況

被介護者K：女性76歳 要介護度Ⅱ 認知症度Ⅱ a

既往歴：統合失調症・認知症（両疾病共に発症時期不明）

入所経緯ならびに当初所見：平成15年1月に当GH入所となるが、それ以前は、精神疾患の為に長期にわたり精神科病棟で入院生活を送っていた。GH入所後、統合失調症の症状はほぼ改善され、物忘れ等「噛む」指導の妨げになるような認知症状は特にみられない。日常生活はほぼ自立している。

4. 事例の環境

食堂ではGH利用者9名と職員約3名の全員が揃って大きな食卓テーブルを囲む配置で席につく。被介護者K（以下Kという）の右の隣席にはCWが着席している。

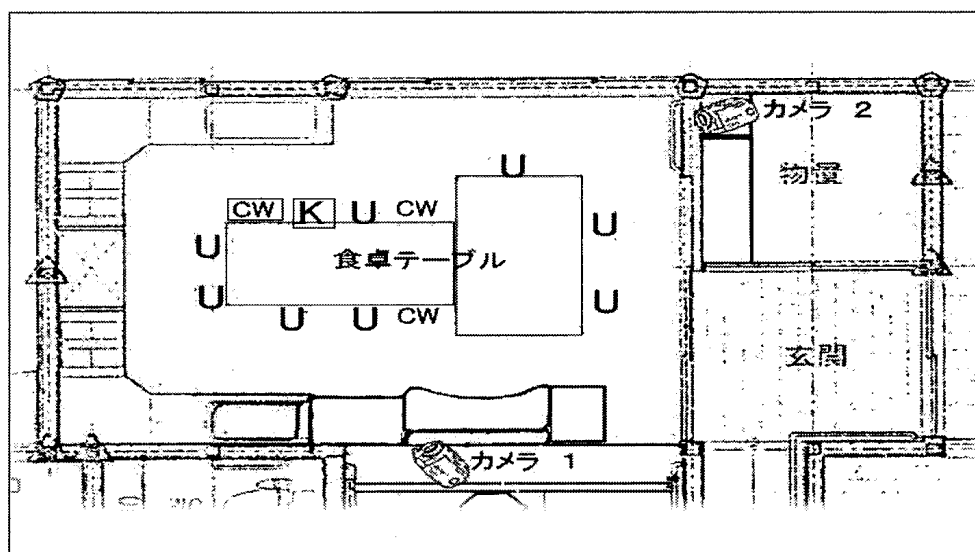


図1 食堂における全員の位置とカメラ配置

5. 方法

被介護者とCWの両者の行為を周囲の環境も含めて同期的に二方の定点からビデオと音声で記録した。

使用ビデオカメラ Victor Hard Disk GZ-MG40 everio 2台

観察期間 平成18年8月8日から平成19年1月30日まで

観察時間 朝食・昼食・夕食 各約60分前後

観察場所・カメラ 1-KとCWの両者を正面から撮影

- ・カメラ2-KとCWを中心に食事時の食堂全体を側面から撮影
(図1参照)

ビデオ録画した指導場面を繰り返し観察し、指導場面でCWとKの双方の行為とやりとりをカテゴライズした。また、カテゴライズにあたっては、部分的にKとCWとの会話をトランスクリプト化し、相互行為の詳細からカテゴライズを見直した。

6. 倫理的配慮

入所者全員と職員には口頭で伝え、家族には文書で説明し了解を得た。特にKには詳細を伝え了解を得た。

7. 結果

(1)：初期方策

(ア) 口内の咀嚼を口外から観察することの難しさ

Kの咀嚼行動に対するCWの対応は、時期を追って変化している。そこで、大まかに、8月上旬とそれ以降に分けて、その方策をカテゴライズした。カテゴライズにあたっては、まず、ビデオの繰り返し観察により、主なCWとKのやりとりをパターン化するとともに、トランスクリプトによってその妥当性をチェックした。

図2の咀嚼指導は指導当初(8月初)に数回行われていたものをパターン化したものである。これを以後「初期方策」と呼ぶ。

各方策を見ると、いくつかの興味深い問題が浮かび上がってくる。ひとつは、咀嚼行動をチェックすることの難しさである。

たとえば、初期の方策4は、CWがKの「あーん」などという発語によってKの口内を開けることを促し、うまく咀嚼が行われているかどうか確認

するためのものである。しかし実際には、Kは食物を飲み込んだ後で、Kの飲み込んだ食物が果たして十分に咀嚼されたかどうかは不明であることが多かった。

方策CWの発語・ジュースチャー(例)	事前のKの行動例	事後のKの行動例	指導で達成すべき目的	指導の対象となるKさんの行為	指導デザイン
1 「かまなあかん」	食べ物を箸で口に運ぶ	-	噛んで、飲み込む	噛まずに、飲み込む	ことばによる「噛み」への注意の促し
2 「なんかべろつとでたよ」Kのほうを向く	舌を出しながらおかずを持ち上げ、口に入れる	視線をCWからご飯におとす	噛む	突き出した舌の奥に置いて、待ちかから直ぐ飲み込む	目的を絞る=障害となる行為を見つける
3 「よこのほう、入口の方へこう置くんやで」	うなずき(事前のCWの呼びかけに対して)	-	口内に留めて、ほった側の歯の上に運ぶ	口内に留めているかどうか外から見えにくい	飲み込みの原因を正す
4 Kの肩を叩き「あ：んしてみ」	何度か頭をゆっくり上下させる	CWに向かって口を開ける(口には何も無い。)	指導中に口内を開けさせて本人の咀嚼を確認する	すでに飲み込んでしまっている	口内状態の確認
5 「かむ、うんうんうん」(Kさんに向かって噛む動作をする)	うなずき(事前のCWの呼びかけに対して)	-	指導者自身が咀嚼演技をしてみせる	うまく真似をしない、行為を身につけない	モデル提示による学習
6 別の入所者を指して「おいしそうにたべはるやろ、な？」	うなずき(事前のCWの呼びかけに対して)	うなずき	他の利用者の咀嚼を指摘する	うまく真似をしない、行為を身につけない	モデル提示による学習
7 「Kさんおちゃのまなあかんよ」	箸で口に運ぶ	箸を茶碗の上に置く・湯飲みを口に運ぶ	お茶によって喉を冷やして食物の通りをよくする	お茶なしに食べ続ける	誤嚥の危険の軽減

図2 咀嚼指導の初期方策

また、初期の方策1, 3, 5, 6のような「噛む」ことを促す発話も、その効果のほどはよくわからない。なぜなら、事後のKの行動は、必ずしも顎の上下を伴わないし、顎が上下している場合も、正しく歯の間で咀嚼が起こり食塊が形成されているのか、それとも食物を舌の中央に置いたり飲み込んだりした後に単に顎を上下させているだけなのかは、観察できないからである。

つまり、見えない口内を推測しながらことばによる注意を与えていくという困難な課題にCWは立ち会っているのである。

初期の方策2, 7を見ると、CWは、Kの目に見える行為に注意を促すことで、間接的に咀嚼を促すという方策も採っていることがわかる。

たとえば、2は、舌出しに対する注意である。舌を出しながら食べることは、直接に咀嚼の欠如につながるわけではない。しかし、舌の中央に乗せて

そのまま口の中に巻き込むと、咀嚼なしに喉の奥に食物が飲み込まれる可能性が高い。舌だしに対する指摘は、こうした喉奥へ食物を直接送り込む行為に対し、注意を喚起する効果を持っていると言えるだろう。

(イ) 行為を改変することの難しさ

ただし、Kの舌だし行為はなかなか修正されない。たとえば、下のトランスクリプトでCWとKのやりとりを確認してみよう。

【会話例：「ぺろっと出た」2006年8月11日】

- 57 ((K:舌を出しながらおかずを持ち上げようとする(試行1)))
58 (0.8)
59 K: ((舌を出しながらおかずを持ち上げ、口に入れる(試行2)))
60 K: ((CW1のほうを向く))
61 CW1: ((Kの肩を二度叩く))
62 CW1: なんかぺろっとでたよ((CW1:Kのほうを向く))
63 K: ((視線をCW1からご飯におとす))
64 (3.9)
65 CW3: からいね
66 (1.4) ((K:ご飯を口に運びようとして舌が出る))
67 CW1: ん?べろ(舌)ださないで

57-60で、Kはおかずを口に運びようとしながら、つい舌を出してしまう。また、Kは自発的にこの過程でCW1のほうを向く(60行目)。この点で、Kは何らかの問題を感じてCW1にコミュニケーションを求めていると考えられる。しかし、CW1が肩を叩いて「なんかぺろっと出たよ」と、Kの舌出し行動を指摘すると、Kは視線をCW1からそらし、ご飯をじっと見つめる。その後、66行目で再びご飯を口に運びかけるが、このときまた舌が出てしまう。CW1への視線移動による問いかけ(60行目)や、注意を受けたあと

のご飯への凝視（63行目）があるにもかかわらず、舌だし行動を止めることはできないのである。あるいは、この行動は、Kにとって不随意的なものなのかもしれない。Kは現在もなおこの舌だし行動を続けているからである。

（ウ）うなずきは必ずしも行為の改変を伴わない

Kとのコミュニケーション上の問題も行為の改変を難しくしている。それは、CWに対するKの行為からも見てとることができる。たとえば次のトランスクリプトを見てみよう。

【会話例：「ちょっと出たかな」2006年8月11日】

- 72 CW1: のまないで
73 (0.6)
74 CW1: う：ん ((K: 前方を見てうなずき))
75 CW1: ちょっとでたかな：
76 CW1: おはしでね
77 K: ((前方を見てうなずき))
78 CW1: よこのほう，入口の方へこう置くんやで
79 (0.7)

CWは72行めで「噛むこと」に注意を促し（初期方策1），75行目で「ちょっと出たかな：」と舌出し行動を指摘し（初期方策2），さらに，78行めで「よこのほう」に食物を移動させることを促している（初期方策3）。これらの働きかけに対して，Kは74，77行目でうなずいている。

うなずきという行為だけを取り上げるなら，Kは相手の働きかけの直後にタイミングよくうなずいていると言える。しかし，問題は，うなずきの方向と，その後の行動である。KはうなずくときにCWを見ていない。また，うなずきのあと，CWの指示に対して具体的なアクションを起こしていない。CWのさまざまな方策は，うなずきによって受容されてはいるものの，相手の口

内活動を変容させるには至っていないのである。

CWの指導をやり過ごすというKの行為の傾向は、初期以後にも見られる。この点については後述する。

(2)：中後期方策：指示と操作が可能な指導方策へ

(ア) 代替行為の発見とKによる punctuation

初期方策にあった「噛む」ことについての指導に加えて、8月中旬ごろから、新たな方策がいくつか追加されるようになる。これらはすべてが毎日使われるわけではなく、日によって一部のものが使われる。ここでは、これらの新たに加わった方策を「中後期方策」と呼んでおこう。8-15は、番号が増えるほど、後になって現れた。

「中後期方策」は、しばしば「初期方策」と併用され、とくに、初期方策の1, 2は、中後期でもほぼ毎日のように行われた。

初期方策はKに噛まない行為を自覚してもらい、それを本人に抑制し修正してもらおうとする指導であった。

それに対して、中後期方策は噛まないことに付随している可視的な代替行為を見出して、それをCWが監視し発見したら、即座に指示をして訂正させるものになっている(図3)。

このことは、噛む／噛まない、という口内の現象を、より観察しやすい行為によって推測しようとすることの表れだと言えるだろう。

初期方策にもこうした可視的な現象による代替はいくつか見られたが、中後期ではさらにバラエティが増していると言えるだろう。

口内で噛むことと、観察可能な現象とは、実際の会話の中でも結びつけられている。以下の簡単な例を検討してみよう。

【会話例：「口あけないで噛む」】

132 CW1 □すぼめて

133 CW1 □あけないで噛む

方策 CWの発語・ジェスチャー(例)	事前のKの行動例	事後のKの行動例	指導で達成すべき目的	指導の対象となるKさんの行為	指導デザイン
8 「おい、あ、びっくりした」	《大きなかたまりを口に入れる》	《飲み込もうとして口を開く》	少ない分量を口にに入れる	舌をだしたまま口を開けていて、小さく噛む	障害となる行為への事後的な指摘
9 「ちょうちょうつとスピードださんとき」	《咀嚼前に連続して口にものを運ぶ》	《正面やや下を向く》	食べるのが遅過ぎる	口を上に向けて(大きく開けて)放り込む	障害となる行為への事後的な指摘
10 「下向いて」	《飲み込もうとしてやや上を向く》	《正面やや下を向く》	口にに入れる時に、下を向かせる	ときどきできるが、大半の場合は難しい	障害となる行為を指摘、中断、訂正
11 「くちあけんとかまな、はがずれるわ」	《口を開ける》	《Kかがみを見ようとする》	入れ歯がずれないように	口を開けて噛む	障害となる行為への事後的な指摘
12 「口すぼめる」	《口を開ける》	《口を開ける》	口を閉じて噛む	どうしても口が開いてしまう	障害となる行為を指摘、中断、訂正
13 「ひとくちいれるたんびにかがみみればいい」	《口の開閉の指導を受ける》	《かがみを見る》	咀嚼前の嚥つけや運びを止める	見逃しも多いが、口に入る前に指摘が間に合えば有効	障害となる行為を指摘、中断、訂正
14 「噛んで」	《リンゴを口にする》	《リンゴを口にする》	少しだけ食べる	キュウリ、リンゴなどは噛む	目的を教える
15 「これも交代に食べなあかんで」	《連続して同じものを次々口に運ぶ》	《連続して同じものを次々口に運ぶ》	グズグズせず、残さず全部を食べるように監視する	口内で多くの量を噛むのが難しい。入れ歯がずれることがある。	障害となる行為を指摘、中断、訂正することができる

図3 咀嚼指導の中後期方策

ここでは、「口をあけない」ことと「噛むこと」とが結びつけられている。本来、「口をあけない」という行為は、直接噛むことを指しているわけではないし、噛むことの十分な条件でもない。が、口を開けたまま舌を巻き込んで飲み込むという行為を防ぐことはできる。いわば、観察できない「噛む」という行為のかわりに、「口をあけない」が、観察可能な達成課題として取り上げられているのである。

中後期方策と初期方策との違いは、指導対象についてより明確な基準を指示し、行為を外部から操作できる可能性があることである。中後期方策の10, 12, 13, 15では、指導されるKの行為は、規制、中断、訂正という外部からの操作が可能である。つまり、予め基準と方法のルールを決めて注意を与え(規制)、必要に応じて停止を促し(中断)、訂正やり直しを命ずることができる(訂正)。

(イ) 指導知識の共有、指導の重複や割り込み

さらに、中後期方策が用いられることによって、Kの食事行為はその時に担当しているCWだけに見えるものではなく、他のCWからも容易に

注意の対象となることができている。「噛む」という口内活動は周囲からはモニタできない。一方、可視化された代替行為は、担当 CW によって指摘され、周囲で聞いている CW 達も即座に理解できる。

発言は、時にはルールや事前の注意であり、時には中断や訂正の指示であり、時には失敗したことの事実状態の表現でもある。指導の逐一の様相は周囲の CW にも共有され、他の CW による指導の重複や割り込みを自然に促す。

じっさい、指導方法や指導の際に用いる用語や概念は、指導に携わる側にいる CW 達に共有される知識となるように手続きされている。このことは以下の会話例からも分かる。

【会話例：「モグモグちゅかんじ」 2006年9月9日】

- 104 CW1 カチカチいくんじゃなしに
 105 CW1 フンフンフンで噛む
 106 (1.2)
 107 CW1 噛むちゅうよりはわたしモグモグちゅうかんじやけど
 ((CW3に顔を向けて))

おもしろいことに、107行目の発話で、CW1は K から視線を別の介護職員である CW3に向けて発話を行っている。つまり、ここでは、単に K に対して指導がなされているだけでなく、周囲にいる同僚の CW に対して「モグモグ」が K への働きかけとして適切であるかどうか問われているのである。

K への実際の指導場面の中には、CW 間による指導方法の試行錯誤の過程が埋め込まれている。そして、その中では、単純に「噛む／噛まない」という峻別から一歩進んで、「モグモグ／カチカチ」という新たな峻別方法が開発され、それが CW どうしでやりとりされている。指導方法の発明・発見は K への表現であることと同時に、周囲にいる CW にとっても共有され理解されるものとなっているのである。

(ウ) 指導側の方策とは

指導の最大で本命の目的は「噛む」行為の習得である。しかし、初期方策・中期方策における指導の目的は図4のように「噛む」行為の周囲に付随的にある行為の方だと考えることができる。「噛む」が不可視で把握が困難であるのに対して、これらの付随行為は可視的なものであり、大半は指示や明示が可能で、CW 同士にとっても理解が容易で、指導場面の進行状況を共有化させるものとなっている。また、場合によっては、直接に K の身体動作を操作できる形になっている。

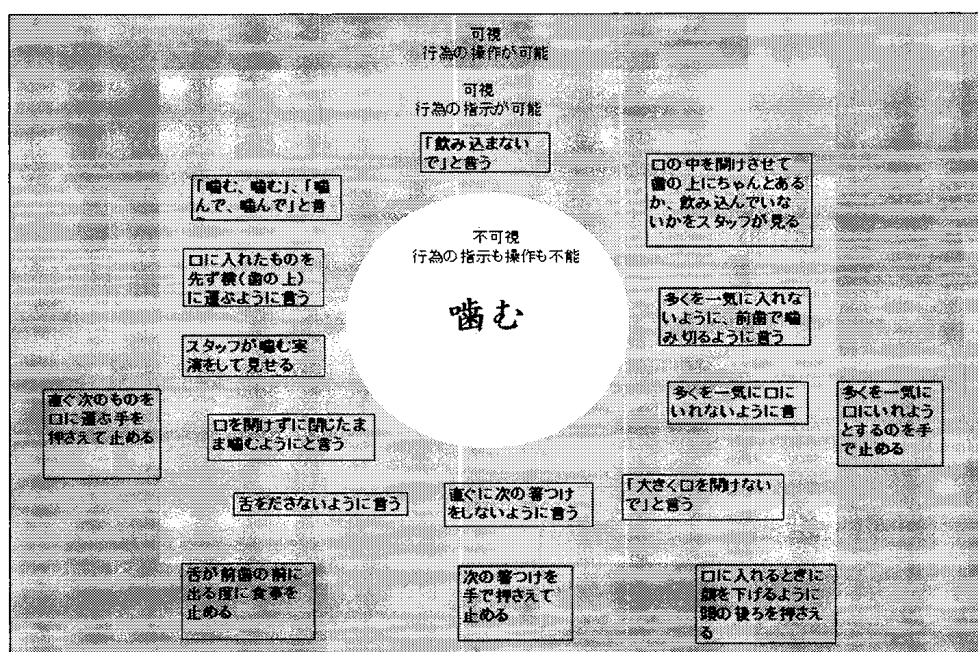


図4 「飲まずに噛む」指導の構図

こうした、指示や操作の対象となる K の代替行為は、指導の文脈から見て、K の阻止的な行為への対応という合理的なステップであるように見える。

ただし、これらの代替行為が指示や操作の対象として本当に妥当なものであるかを CW が論理的に K に諭したり、説明したりする場面はそれほど多いわけではない。「口を閉じて」「舌を出さないで」のように、マナーに対する日常の常識判断のように情緒的に見えるものもある。

ひとつひとつの指導方策は必ずしも図4に描かれたようなスキーマに沿っ

てあらかじめ整えられたものではない。むしろ、既存のマナーや知識が組み合わされたもののように見える。これは、CW どうしが自分たちの指導を理解しようとする際に、既存のマナーや知識を援用しようとしたためだろう。

(3) : 従順な K と混乱する K

(ア) 指導に対して従順に従う K

さまざまな CW による指導に対して K は反抗や抵抗を一切みせることはない。とはいうものの、K はただ従順に指導に従っているわけではない。

結果(1)の(オ)で見たように、様々な指導を受けていても、K は一向に「啗む」という行為を身に付けようとしてはいない。このことを、中後期の会話のやりとりからも拾い上げておこう。

【会話例：「寒い」2006年9月9日】

- 34 CW1 こんな感じになるで (K の右肩を左手で叩く：実践例)
35 (0.6)
36 K “うん” (うなづく)
37 (1.3)
38 CW1 すっとな
39 CW1 口んなかで食べ物が踊って歩くんや
40 (0.5)
41 CW1 な?
42 K 寒いね
43 CW1 うん
44 (1.6)
45 CW1 どこが寒いん?
46 (1.0)
47 K “○○○”
48 (1.0)

49 K せなかさむい

KはCWに肩を叩かれてから、一度は小声を出してうなずいており(36行目)、CWの働きかけに答えている。しかし、39行目のCWによる具体的な比喩に対し、Kはすぐには応えず、非選好的な沈黙が40行目に続く。CW1がもう一度念を押すように「な?」と問いかけると(41行目)、Kは突然「寒いね」と話題を変える。

Kはこの事例だけでなく、全く異なる話題への飛躍によって、隣接ペア的応答から離脱してしまう発語をしばしば行う。発語だけでなく、くしゃみのような非言語的な活動が使われることもある。

【会話例：「くしゃみ」2006年9月9日】

- 98 CW1 Kさんなんでもな
 99 CW1 口入れたら口あけないで
 100 (1.6)
 101 CW1 こみ
 102 CW1 [あの]:
 103 K [(くしゃみ)]

100行目で非選好的沈黙が続いた後、101-102行目でCW1は新たな言い直しをしようとしているかに見える。しかし、その最初の部分でKはくしゃみをするによってCW1の発語の聴取を難しくしている。

にもかかわらず、CWたちは粘り強く中後期の指導を継続している。

その原因は、Kによるさまざまな方略が、CWに対する異議申し立てとしてではなく、日常会話の中でよく使われる方略の形を採っているからだろう。

CWが横で一緒に食事を摂りながら途絶えることなくKへの指導と監視を行う。一回の食事中でもかなりの頻度で、食べ方や口の動かし方について執拗に注意されつづけている。これらはかなりのフラストレーションをもた

らす自由度の低い飲食に見えるのだが、不思議なほどにKの抵抗や不満がない。口を開けてみせるという行為も指示される都度に抵抗なく素直かつ従順に行っている。むしろ、時には自分から口を開けて見せることもあり、KにはCWとの良好な関係を崩したくないという動機があることが推測できる。Kによる従順な受け容れによって、指導行為は、単なる強制ではなく、コミュニケーションの一場面として成立している感を周囲に与える。

(イ) 前指導と後指導に対するKの反応

指導には指導される行為の前になされて、本人に行為の修正を求める指導がありこれを前指導とするなら、指導がKの行為の後になされて、本人に行為の修正を求めるとことができない後指導がある。

Kがもっとも難渋していたのは、指示と操作が組み合わさった前指導が緻密に行われているときである。8月初めの咀嚼指導当初のCWの指導の場合には、「噛む」直前の行為を抑制する指示や操作が多く、前指導が頻繁な食事場面があったときのKはかなり戸惑い、困っているように見える。Kの飲食マナーがことごとく注意され、否定される。中断を余儀なくされ、訂正とやり直しを命ぜられるのである。複合的で密度の高い前指導に対して、Kにはかなりの混乱があったようである。時には自ら食事行為の中断をしなければならなかったようだ。この時期、食事の中のひどい混乱（あるいは辛さ）を抑えるために、自ら箸を何度も長時間テーブルに置いたままにしたり、手を膝においてジッと身動きを止めてフリーズしたり、あるいは周囲を何度か見回すという行為が見られた。

それに対して、それ以降8月末から10月にかけての指導は密度が和らいでいるようにも感じる。担当するCWによるのだが、質的にも指示的な指導から操作的な指導が増える。これも前指導ではあるのだが、Kに混乱はそれほど見られない。指導があるたびにKは従順に従い、操作的な指導を受けても即座に従うだけのように見える。時間の経過とともに、Kは指導の方向に馴れて学習したようにも見える。

ただし、Kはこうした指導によって、自発的に「噛む」行為を獲得していたわけではない。

CWにとっての操作的な指導は、実はKにとって受け容れやすいように見える。操作を受けたその時だけその強要されるままに単純に従っておればよいからである。なされた操作に従順に従うことを自分の飲食のプログラムの一環としてはめ込んでしまえば、それは容易にパッシングすることができる。

結局、Kは「噛む」という行為を身に付けることはないのだが、「噛む」ための可視的な指導に従うことは身に付けているように見える。

(4) : Kの飲食サイクル

(ア) 口に食べ物を運ぶまでのコントロール

口内での咀嚼や舌をうまく使った飲食物のコントロールは、複雑で臨機応変の運動行為である。

口内で咀嚼中の食物がどのような状態にあるかは、舌や口内の粘膜によって刻々とモニターされ、その情報は、次なる口内運動へと利用されて、咀嚼済みの食塊は次々と喉に運び込まれていく。まだ咀嚼を続けるかどうか、どれくらいの分量を頬に運んで歯による咀嚼を先行させるべきか、順次どれくらいの量を喉に運び込むか、あとどれくらいで口内の咀嚼は終わられる予定か、お茶はいつ飲むべきか、いつごろ次の料理の箸付け作業に向かい、いつどれくらいを新たに口内に運ぶべきか等々、モニターされる状態はいくつもある。これに、おいしい、まずいに関連する情報や、硬い、柔らかいに応じる顎の運動制御なども加わる。さらには食卓での発話をコントロールすると、尚一層複雑で錯綜した情報処理と運動制御となる。

Kの場合はどうであろうか。

Kが食卓につくと、常に真っ先に自らお茶を飲むことが確認できる。また、食事中にも頻繁にお茶をのみ、頻繁にお代わりもする。また、頻繁に食事のおかずが何であるかを周囲に名称で確認する。例えば、「これはお揚げ?」「こ

れ、さかな?」とCWに尋ねる。また、苦瓜に対して「苦いね!」と食事場面にふさわしい口ききをするし、料理をさして「これはx xやね!？」と聞いて料理の名称をしきりにCWに答えさせようとする。また、そのことを周囲にも聞こえるような声でも頻繁に言う。これらは他の利用者にはほとんど見られないK独特の行為である。

Kにとって、口内に入ってしまったからの食物情報の入手や、口内の処理動作運動が難しいのだとすると、大きいもの、尖ったもの、硬いものなどを飲み込んでしまうリスクが大きい筈である。そこで、Kにとって「噛む」という行為の、その前段階で料理名や食材名を把握することはたいへん重要なKの情報戦術だと推測できる。口に入れるまえに少しでも多くの料理や素材の事前情報を知った上で口に運ぶことや、その事前情報に基づいて料理を予め箸で分けて、口内で処理が可能な分量に分割した後に口に入れることはKにとって重要な飲食方策なのだろう。

Kは口内での「噛む」という行為をしない。その代わりに口外で予め料理、素材名を確認し、予め手で料理をお箸わけしている。これは、飲食物が何かを確認し、手で操作することによって「噛む」の代替行為を行っているのだと考えられる。また、しきりにお茶を飲むことで、嚥下するさいの飲み込みをスムーズにしているようにも推測できる。

興味深いことに、こうした、K独特の巧みな飲食方策を、CWは指摘したり議論している形跡はない。Kの口に運ぶまでのさまざまな方略は、CWに気付かれることなく維持されつづけていたことが観察ビデオから見いだされるのである。

(イ) 見過ごされる「飲みこみ」

Kの独特の飲食スタイルには「噛む」に代わる方策があり、常に維持され続けていたようにみえる。前述のように集中した前指導による混乱の場合も稀にはあるが、一貫して独特のスタイルはほとんどの食事場面で維持され、ほとんど変化した様子はなさそうである。

前記までのCWの方略とK独特の飲食方略を整理すると下図5のような一連の飲食サイクルが見えてくる。

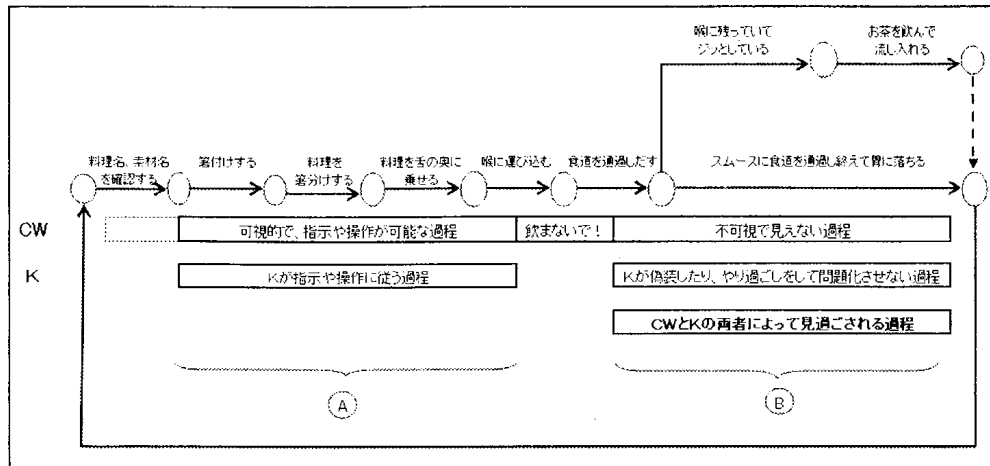


図5 Kの飲食サイクル

咀嚼指導の当初、問題化されていたのは、明らかに「口に入れたとたんにあっという間に飲みこんでしまう」という奇異なKの飲食行動であった。これから、直ぐに誤嚥や喉詰めの危険が認識されるようになった。「嚙まずに飲む」ことの危険を回避するために「飲まずに嚙む」指導が始まったのである。「飲み込む」ということを問題化し、それを起点として咀嚼指導が始まっていた。

ところが、「飲み込む」ことは不可視でよく見えない。また、「飲み込む」事実は常に「飲み込んでしまった」後になって気付かれるので、後指導を通して本人に自覚してもらってから行為の変更をしてもらうように促すことしかできない。しかし、Kはこうした後指導に対してうまく答えることができない。初期方策の5,6はまさにそうした過程である。

他方でKもまた飲みこむことを巧みに偽装して実行している。CWが他に顔を向けている隙や、指導するCWから見えなように反対に顔を向けている間にすばやく「飲み込む」こともしている。「飲み込み」の事実をたとえCWに見つけれられても、これは後指導であり指導をやり過ぎしつづけておれば、いずれは問題化されることはなく終わるものであった。おそらく、

こうしたKの対応にもかなりの効果はあっただろう。

こうして、図5の飲食サイクルの可視的で前指導が可能な④の過程に指導は偏ってゆかざるをえなくなると同時に、不可視で後指導しかできない「飲み込み」の後の⑤の過程はそれほど注目されなくなってゆく。「飲み込んだ」事実が見つかったとしても、その場合に中後期方策の「嚙まなかった」ことにまず注意が向けられる。

その一方で、Kの喉に未だ飲み込んだものが残っている現状にはそれほど注意は向けられていないようにすら見える。食堂にいるCW全員が「飲み込んでしまった」事実まったく気付かないままKの喉に飲み込んだものが残っているような場面も多く観察できる。また、たとえ「飲み込んでしまった」事実気付いても、指導の対象として注意や関心の対象になっていない場面も観察できる。

これは指導する側と指導される側の両者が生み出す共同の場において「飲み込み後」が注目されず、見過ごされがちになっているということである。指導する側のCWだけでなく、随時に食事場面に参加し、ビデオ記録を分析し続けていた観察者にも同じように⑤の過程はそれほど注目されてはいなかった。誤嚥もしくは喉詰めに防止するということはCWが常々に意識していたことは間違いない。しかし、ことKの飲食場面においては「嚙む」ための前指導に強い注目が注がれてしまい、「飲む」後指導は注目されにくい対象になっていたように見える。

8. 結論：「嚙まない」ことは問題か？

Kに対する咀嚼指導は成功したか？と問われれば、答えは明らかに成功したとは言えない。現在もCWによる咀嚼指導は穏やかに行われている。ほとんどが前述の中後期の方策に当たる前指導で、指示的・操作的なものである。しかし、これからもK自身がそれによって自らの飲食スタイルを変更することはなさそうである。時折、箸つけの手を止められても、口を下に向けるように頭の後ろを押されても、その一瞬を受け流すだけである。これらの指

示的・操作的な指導方策のどれもが、「噛む」と言う行為の周辺の断片的な代替行為であり、Kにとってそれらを一瞬のみ受け容れてやり過ごすことはたやすいことのように見える。

しかしながら、現在のKの飲食風景は、以前に比べて大変に大らかだという印象を受ける。CWによる指導がなされていても、飲食風景が楽しそうでくつろいでいるように見える。「噛んで!」という指導の言葉は、もはやKにとって施設のなかで自分が注目されているという心地よいコミュニケーションになっているのではなかろうか。

最近では、いつもながらのK独特の飲食のときに、指導されなくても自然な形で咀嚼らしい顎の動きが挿入されていることが見えることすらある。しかしそれは散発的で、必ずしも持続しない。

Kは一年の間、指導をされ続けたにもかかわらず結局「飲まずに噛む」ことを繰り返してきた。Kの食べ方を見ていると食べ物を咀嚼して味わうのではなく、「舌ごし」とか「喉ごし」で味わっているようにすら見える。

Kにとって、GHのCWから自分が特別な指導を受けていることや、介護研究の名目で数人の外部スタッフがGHに入り自分が注目されていたことは不快でなかったようである。KがGH生活のなかで注目され、さまざまな関与の中にあつたことは、Kの生活をかなり充実したものにしていたように推測される。咀嚼らしい行為はそうした心地よい環境のなかで自然とKの独特の飲食スタイルに幾分か取り込まれたのではなかろうか。

コミュニケーションを介して相手に何かをしてもらうという点からすると「噛まないことが問題である」という考え方から、「食べるのに必要な処理をK自身ができるように支援する」という考え方にシフトする方法があっても良かったのではないかと反省させられる。きつい言葉で指導されても、外部研究者と目があうと一瞬Kの目が和らぐのを感じた時、「噛む」とか「噛まない」以外にもっと見ていくべきものがあると気づかされたように感じる。

本研究では高齢者福祉の大義や期待からの理解を一旦中断して、現実の福祉実践のフィールドの中にビデオカメラを据え、CWとKの相互行為を理解

しようと試みた。この過程で、Kの咀嚼を改善する決定打が見出されたわけではない。しかし、以前は見過ごされがちだった食事場面でのさまざまな方略が明らかになり、それはCWたちの指導とは別の側面を持っていることが明らかになった。

これらの知見はCWとのディスカッションを通してCWたちにも共有されつつある。今後、ここで出された仮説を現場にフィードバックしながら、さらに検証を進めていきたい。

謝 辞

本研究では、1年7ヶ月にわたり、認知症高齢者対応型Sグループホームで調査させていただきました。泊り込み研修をさせていただいたり、ビデオの撮影をお願いしたりと多大なご協力をいただきました。中でも管理者の富田しず子さんには格別なご配慮をいただきありがとうございました。心からお礼申しあげます。

引用文献

- 1) 西阪仰『相互分析という行為』金子書房, 2004年 p18

参考文献

- 1) 木下康仁『グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂2003年 p49
- 2) 秋田喜代美『授業研究と談話分析』放送大学教育振興会, 2007年
- 3) 好井裕明, 山田富秋, 西阪仰『会話分析への招待』, 世界思想社, 2004年
- 4) 西阪仰「心と行為」岩波書店, 2001年
- 5) 西阪仰『相互分析という行為』金子書房, 2004年
- 6) 山崎敬一『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣, 2001年
- 7) 山崎敬一・西阪仰『語る身体・見る身体<附論>ビデオデータの分析法』ハーベスト社, 2004年

324 「飲まずに嚙んだ?」「嚙まずに飲んだ!」

8) G. サーサス, H. ガーフィンゲル『日常性の解剖学』訳者 北澤祐・西阪仰, マルジユ社, 2004年

付 記

本稿は平成18年度私立大学等経常費補助金（私立大学教育研究高度化推進特別補助）学術研究高度化推進経費共同研究経費の助成による研究成果の一部である。